今なお残る条坊制

西村　さとみ
文学部　人文社会学科　歴史学コース　准教授

■二条大路－平城宮から東大寺へ－

奈良女子大学の南門の前を東西に走る細い道。それが 1300 余年前、平城京で朱雀大路に次ぐ広さを誇った二条大路の名残だと聞いて、戸惑う人は少なくなかろう。天皇の居処や国政機関が建ち並ぶ宮の正門すなわち朱雀門から南に延びる大路の道幅は約 74m、二条大路はその 2 分の 1、約 37mもあったという。

『続日本紀』によれば、2 つの大路の接点となる朱雀門前では、霊亀元（715）年元旦に「陸奥・出羽の蝦夷」や「奄美・夜久」の人らが産物を貢納する儀式がおこなわれ、天平 6（734）年 2 月 1 日には、二百数十人の男女が「難波曲（なにはぶり）」「倭部曲（やまとべぶり）」などを唱和する歌垣（うたがき）が催されて、聖武天皇も見物に赴いていた。復元整備された朱雀門前の広場に立てば、往時の二条大路の規模がうかがわれよう。

その二条大路の東端に、西に面して巨大な門が築かれたのは、8 世紀後なかばのことであった。現在は石碑と当初の位置から移動した 2 つの礎石が見られるにすぎないが、そこには、天正 11（1583）年の大風により倒壊するまで、「金光明四天王護国之寺」の額を掲げる東大寺の西大門が建っていたのである（『東大寺諸伽藍略録』、『奈良六大寺大観 九 東大寺 一』）。

■金光明最勝王経と盧舎那仏

本学にも模写本が伝わる「東大寺山堺四至図」には、それが作成された天平勝宝 8（756）歳ころの同寺の伽藍堂塔や周辺に広がる寺領の景観が描かれており、「西大門」の墨書も確認される。岸俊男氏は、その「西大門」の文字の傍らに「東大寺」と記されていること、大仏殿の南側には「山階寺（興福寺）東松林廿七町」が広がっていて、南進する道はまだなかったと考えられることなどから、西大門が創建時の正門であり、「門を入ると国分寺の中心である七重西塔の前を通って盧舎那仏の坐す大仏殿院の中門前に至ることができた」と述べられている（「平城京と『東大寺山堺四至図』」『日本古代宮都の研究』所収）。

東大寺西塔の完成時期はさておき、天平 13（741）年に出された、いわゆる国分寺建立の詔に「天下の諸国をして各七重塔一区を敬ひ造らしめ、并（あは）せて金光明最勝王経・妙法蓮華経一部を写さしむべし。朕また別に擬（はか）りて、金字の金光明最勝王経を写し、塔毎に各一部を置かしめむ」（『続日本紀』同年 3 月乙巳条）とあるように、七重塔は確かに国分寺の中心であった。

ただ天平勝宝元（749）年、東大寺に行幸した聖武天皇は、「盧舎那仏像の前殿に御（おは）し

まして、北面して像に対(むか)」い、「三宝の奴と仕え奉(まつ)る天皇(すめら)」と自称している（『続日本紀』同年 4 月朔条)。「南面之王」「北面之臣」（『類聚国史』弘仁 14〔823〕年 4 月己酉条）の語にいう臣下の礼をとったのか、あるいは南面する師に向き合う仏弟子たらんとする思いのあらわれか（新日本古典文学大系『続日本紀 三』補注)、いずれにせよこの時の聖武の姿は、金光明最勝王経に説かれた、経典を流通させることにより国土の安寧を祈願する君主像とは異なるのである。金光明最勝王経と盧舎那仏を主尊とする華厳経、それぞれの教義を聖武はどのように受けとめていたのか。私たちはまだ、彼の真意を理解しつくしていないように思われる。

■積み重なる人びとの営み

承平 4（934）年、雷鳴がとどろき、「大和国々分寺」たる西塔は焼失した（『日本紀略』同年 10 月 19 日丙戌条)。平安末期に書かれた『七大寺巡礼私記』によれば、しばらくの時を経て天慶年間（938〜947）以降、西大門は閉じられたという。そこから西へと歩みを進めても、京はすでに大和を離れており、国政の中心としての宮に辿りつくことはない。

景観は移ろい、場のもつ意味や道の機能も変化したが、条坊制による区画は以後の土地利用に少なからず影響を与えた。日々使用している道が平城京の大路・小路の名残であるといった事例は二条大路ばかりではない。ただ現在、それらの道幅が変わり、また必ずしも直線上に延びゆかないところに、1300 余年にわたる人びとの営みがあらわれていよう。長岡・平安京遷都後に、その地がいかなる歴史を辿ったのか。平城京の痕跡をただそれとして見るのみならず、そこから現在にいたる過程をも見通す目をもちたい。

①奈良女子大学南門前

②朱雀門前広場

③東大寺山堺四至図　模写本　奈良女子大学所蔵
http://mahoroba.lib.nara-wu.ac.jp/y18/toudaiji_sankai/

④東大寺西大門趾石碑